# 木村文助研究

通信　18号　　2008・11・6

## 第五五回北海道作文教育研究
## 渡島・函館大会に参加して

七月二八日、二九日、函館市立日吉が丘小学校で標記の大会が開かれ全道から教職員二百に近い参加者だった。大会事務局では道南の地であることから生活綴り方指導の先駆者・木村文助に注目しぶんぽけんにレポート発表を求めてきた。この要請に応え、分科会に資料を整え発表した。

当日配布された要項に木村の名が載るとともに開会挨拶でも紹介された。

発表は教職員ＯＢ中心一〇数人の分科会で行い、資料収集、展示会、講演会など大野文保研の活動、郷土資料室コーナーを設け、説明板の設置、大野広報掲載など大野町教委の対応を内容とした。木村の指導、つづり方を種々論議し、ラジオ放送されたテープを聞いて先駆者の業績を確認した。生活綴り方を現代作文へどうつなげていくかが課題でもある。

大会事務局では会の動きを具に３０号にも及ぶ速報を発行し参加者に伝えられる。「北斗市郷土資料館へ」も記事になり「足を運んでほしい」と呼びかけた。

現在北斗市唯一の資料館であり、市が前面に出てコーナーも含めて機能(宣伝・活用)を発揮してほしいものだ。木下

二〇〇八

五・一　綴り方生活「村の子供」複製・「北海道文化情報」３０７号に載る

同　「木村文助研究」通信No.１７発行

五・一二　「残されている大野尋常高等小学校の綴り方」（一六八編）氏名・題名集作成・文保研

五・一九　大野中再任教諭・森野司氏郷土資料室へ

五・二六　函館ＦＭいるかラジオ出演「大野の綴り方」・木下寿実夫

六・六　前記のラジオ出演採録作成

六・一二　本の寄贈「私の綴り方教室」・森野司氏

六・一六　「図説　函館・渡島・檜山の歴史」発刊（「木村文助と綴り方教育」も載る）・郷土出版社

六・一六　函館市府金氏郷土資料館へ、北海道作文教育研究渡島・函館大会レポート提出で打ち合わせ

六・二三　北斗市教育広報「きらめき」No.９連載『赤い鳥』に載った郷土の作文「食ぱん」（大野小尋六　金川重雄）

七・二八～二九　第５５回北海道作文教育研究渡島・函館大会参加・レポート「木村文助と綴り方教育」分科会発表

八・一〇　札幌市合田一道氏文化講演会の折郷土資料館へ

「村の子供」掲載　大正十一年か十二年作

# 涙

高二　女

テーブルにもたれて宿題の算術をおいて居ると、玄関の戸ががらりとあいた。おや誰だろうとみると父は一人のお客を連れてのこ〳〵と臺所の方へ來た。私の胸ははっとした。又何時もの様におこられるだろうと思えば、一分間でも父の傍にはいられないような氣がして大急ぎで道具を片付けて奥へ行った。

いつも提灯をつけてとる床も、今晩だけは暗がりを手探りで敷いた。何事もなくてくれゝばよいと心に祈りながら、小さく縮まって寝た。二分三分五分と次第に時間は過ぎた、十分位もたった頃「とみ――とみ――」と父の叫ぶ聲に、胸がどき〳〵して返事もしないで、むっくり床の上に座った。「とみ寝ていた者でも起きて仕事しているのにお前どうして寝た。早く起きて切り烏賊せ」といった。「はい」と云いながら大急ぎで前掛をあてゝ臺所へ來た。父は蜜柑箱の少し大きいのに烏賊を一杯（澤山）買って來たのであった。客は帰って母と姉が、烏賊の腹などを取って拵えていた。私はまだ一度も拵らいた事がないので、どこからどうして切るのだか分らない。それでも、板の前に座った。私に當った包丁は一番切れないので、ぎゅう〳〵と曲がる。母は「そんあ手附で切れるもんか、井戸へ行って水汲んで來い」といった。

私は井戸へ行ってつるべを上げながらも、自分の悲しい身の上が思われて涙が出た。水を汲んで來た時、父は烏賊の刺身で御飯を食べていた。「とみ、飯盛れ」と私に茶碗を出した。私は御飯を盛って父の手を出しているのに氣が付かず、御膳の上に置いた。父は怒って「なぜ手を出しているのに此處へ置いた」という。私は何も氣附かずに置いたのだから、何とも答えようがなくて黙っていた。父は「耳ないのかッ」と爐の火箸を掴んだ。私は胸が一つぱいで何もいわれない、漸と「氣が附かなかったから許して下さい」と之だけいった。氣が附かずにした事を、こんなにいわれるとは情無い。何時もこうして少しの事で叱られる。雪降に家の前の雪の中へ裸で投げ込まれた事、妹の事で學校の方まで追われてたゝかれた事、色々の事が思い出されてひとりでに涙が出る。臺所の隅に行って涙をそっとぬぐいました。父の叱るのを母（継母）は止めてもくれず「あんまり意気地が無いだもの、よその子供ならちゃか〳〵（さっさ）と働くのに」という。私は其所にはいられない様な穴でもあったら入りたい様な氣がした。黙って隅の方に立っていると父は「どうして其所に立っているんだ。仕事すれと起したのに仕事も仕ないで生狡（なまっ）れ奴だ」といった。私は涙をためながら俎板の前に座って、なれない仕事をしていた。姉や母を見るとすっ〳〵と上手に拵えている。私ばかりはどうしてこうだろうと思いながら、一生懸命に拵えた。みんな拵えた時は十時頃でした。

三つの時別れた母は去年死にました。どうして可愛い子供を五人もおいて、他家へ行ったのでしょう、それには何か深いわけがあるでしょう。それでも母の死顔でも見たかった。三つの時別れてから七つの時、一度逢った事があります。其時母は私の手を取って「私はお前の親でもない、子でもない」とまでいったのですもの、色々の事を思っているとからだがふら〳〵するようでした。氣が附くと自分は部屋の入口へ黙って立っているのでした。寒さに氣が附いて床にもぐると実母の顔が目の前に見える様で、涙が尚も出るのです。いつでもこうして叱られるのを思えば、友達が羨ましくてなりません。一度だってやさしい言葉で物をいわれた事は無い。友達はいつもやさしい言葉で父母から愛されているだろうが、私は父母の眞のやさしい言葉を聞いた事がない。中でも父の方は頑固であるから、兄も弟妹も皆怖がっている。私はなるたけひねくれまいと思っているけども臺、こういう家庭に育った私は、自然にひねくれるのです。私はいつも寝床へ入れば泣くのです。心で泣いているのです、心で泣けば自然に涙が出るのです。こう云う時には床の中へもぐり込んで泣くのです。

評　私はこの綴方を涙なしに讀む事は出來ませんでした。「私はいつも寝床へ入れば泣くのです、心で泣いているのです。心で泣けば自然に涙が出るのです」何というすばらしい直截な表現でしょう。私は何と言って慰めてよいか判りません。皆違った世界に居るのです。各々が自分の城を堅く守って一歩も他を見る事がないからです。お互いの共通点同情心がないからです。私は此の作者がひねくれていないとは言いません。大人は只夫のみを攻めるでしょう。然し作者もそれを自認しているのです。だが其ひねくれるに至った経路には十分同情に値するものがないでしょうか、非難する大人でさえも此位置に置かれたならば、果たしてひねくれずに居られるでしょうか。私はあらゆる大人達に自分の氣分に任せ、氣まぐれに純な子供の心を傷け、永久の不具とならせない事を切に祈ります。

又作者に、「あなたの純眞な告白に打たれない人はありません。無理もないと思います。然しそれはあなたとしてどうする事も出來ない運命とあきらめるより外ないのです、諦めた上で、更にあなたの父や母を愛してあげて下さい。夫が人としての、誰でもの、正しく進む方向で、又あなたを窮地から救う唯一の道なのです。

私は此文につき或雜誌に次の様にかきました。

「涙」という一文を讀んだ時自分は思わず躍り上った。此数年來尋ねに尋ねて尋ねあぐんだものを今見付けた氣がした。そして微かながら、其處からの光が自分の行路を照らしている如く感じた。

勿論此文は精神態度が立派だとはいえない事は、かの（同誌中）下具兒の文と同じである。けれど夫は暫く許さなければならない。彼は今本當の自己を見る道程にある。道程に上った許りのものを餘りに攻めてはならない。夫よりも眞實眞剣な心の叫びによって何を求めているかに耳傾けなければならぬ。此立て直された態度は、やがて自己を教育して堅實な人格を築くであろう事を、信ぜねばならぬのである。

次の時間に之を取扱った當時の光景は今でもありありと目に浮かぶ。自分は此作者を賞賛した。一見不良少女と見える――常に虐げられ通しで表面服従しつゝ内心反攻を以て漸く自己を生かして來た成績も佳良でなし今迄賞められた経験のない――彼女は耳疑う如く瞳目していたが、やがて明かに感激の色が動いた。「傑作である。然し皆の前で讀むか。（甲は本人が望まぬ時は別だが大抵讀む事になっていた）好まぬなら強いて讀まんでもよい」といった。然し彼は意外にも「讀みます」といい出したのである。

讀者は或は此場合の教師の態度を難ずるであろう。あんな人を呪う詞を兒童の前で讀ますとは、と。然し兒童は或地位を有し心の掛引で動く大人ではない。心と心の許しあった（と信じていた）子供同志と教師の間に遠慮は無用であると信じたからである。毛頭悪い影を心に投げないと信じたからである。否水火尚辭せざる彼女の眞摯熱烈な態度が寧ろ好き影響を残すであろう事を信じたからである。

讀んだ結果はどうであったか、讀むこと半にして声は震え目に涙が輝いた。一同頭を上げるものはない。進むに連れて歔欷嗚咽！自分は手を擧げて制した――讀む事を止めてもよい――然し彼は決ても最後迄讀む事を決してやめ様とはしなかった。之を聞いた子供は文とはこうしたものか、生活に立脚せねばならぬものかと自己の体驗の如く感じた。

子供の目はこうして精神的に開けて行った。目が開けたという事は又書く手が開けた事でもあった。然し先にもいった如くこうした惨苦な暗黒な人生を明るい子供に見せすぎた自分を難ずる人があるかも知れない。此非難の意味は自分にも分らぬ事はない。然し明るいとは何だ？暗いとは何だ？餘りに大問題である・・・。

注　評は木村文助　旧仮名遣いを新にした。

あ―い　へ―え　やう―よう　は―わ　―ひ―い　せう―しょう　瞳目は瞠目か

木村はこの文を後の論文、そして研究者も紹介している。このたびの研究会で資料として提出した。大正から昭和にかけての実践に深く学び今に伝えようとの話し合いだった。

全道作文研究大会場

# 赤い鳥・木村文助コーナー

## （北斗市郷土資料館内）

０４１－１２０１

北海道北斗市本町２００

TEL（０１３８）７７－６６８１

開館　平日　　８：３０～１７：００

土・日・祝　９：００～１６：００

函館方面→車で、国道２２７号に入り大野市街地へ３０分

道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほど

して大野方向に入って右折し、更に市街地へ進み５分で着く


編集・作成：文保研総務

発行・大野文化財保護研究会

（略称：文保研・ぶんぽけん）

会長：木下寿実夫

〒四一－一二〇一

北斗市本町六八

（０１３８）７７・８５３５

旧大野町市街地の大野小学校校門を入り右側の木造の建物